

# 夏目漱石の見地 (一)

——新時代への期待と教育的観点——

影山恒男

一

夏目漱石という名前は、明治四〇年代から大正時代の初めにかけての約十年間に活躍した小説家を一般的には指す。けれども、一方で夏目金之助としての個人の考え方や感想、あるいは作家となつてからも小説以外の叙述の中に個人的な見解を開陳している。しかし、言うまでもないことだが、漱石は思想家を標榜して或る特殊な主義を打ち立てたわけではない。(小宮豊隆が「漱石は、例えばドイツの哲学者の多くのやうに、自分の思想を抽象と論理との枠にかけて引き伸ばし、それを、全世界を包摂するに足るやうな、大きな体系に織り上げ、仕立て上げる事に、少しも興味を持ってゐなかつた」という意味でもそうである。)けれども、時代の制約を受けているために今日から見ると違和を感じる事柄が若干あるにしても、洞察の深さという点から傾聴に値する言説があるのは個人の在り方や成長と国家の在り方の諸問題を多角的に検討する意識(相対化の眼)を持っていたからである。

この小論はさまざまの場における叙述を通して〈夏目漱石の見地〉(或るときは夏目金之助的)を今日的に検討する試みである。

たとえば、〈教育〉という言葉の使われ方を見てみると、単独で使われた例は一二五例以上(岩波51年版全集)ある。

「教育の精神」「教育ある人」「国家的教育」「英語教育」「教育家」など熟語的に使われた例をいれると二倍以上になる。例を挙げると、同時代の文明への批判を含んだ小説『吾輩は猫である』（明38〜39）の中に「そりや、善くない事で、相当の教育のあるものに似合はん所作ですな。よく私が苦沙弥の所へ参つて談じませう」（四）と使われている。この場合の「教育」という言葉は「或る品性（他人の悪口を言わないなど）を育てる」という意に使われている。苦沙弥が水島寒月に「あんな奴の娘を貰ふ馬鹿がどこの国にあるものか」というようなことは「相当の教育をうけた者」ならば言わないという意味である。さらに、「所が彼等諸君子は学校で教育を受くるに従つて、漸々君子だんだんらしくなつたものと見えて、次第に北側から南側の方向へ向けて蚕食を企てゝ来た」（八）という使われ方では、教育を受けて悪賢くなつたという皮肉が含まれている。

また、「一両日の後彼等の大胆は更に一層の大を加えて大々胆となつた。教育の結果ほど恐しいものはない」（八）という使われ方は皮肉の度を加えて、逆効果を非難している。（落雲館という私立中学校の生徒たちが苦沙弥先生の屋敷の方まで遊びに出て大声で騒ぎ立てている様子を非難している場面である。この後、苦沙弥が校長に手紙を書いたので垣根ができた。ここには、小賢しくなることへの嫌悪感が出ています。）

他に、「世の中を見渡すと無能無才の小人程、いやにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全く此坊ば時代から萌芽して居るのである。其因つて来る所はかくの如く深いのだから、決して教育や薰陶で癒せる者ではないと、早くあきらめてしまふがいゝ」（十）という表現は、子供の食事時の傍若無人ぶりは決して教育では直せない、と、教育の無力を言っている。

無力を越して逆効果を皮肉っているのが『坊っちゃん』（明39・4）の中の「小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねこびた、植木鉢の楓見た様な小人が出来るんだ」（三）という表現である。坊っちゃんが天麩羅そばを四杯食べた翌日、生徒たちが黒板に「天麩羅先生」と書いてからかった一件の時である。

ほんの数例を見ても、教育の効果と逆効果についての言及が、桁違いに多いところに激石的な意味があるように思われる。（小賢しいことへの特別な嫌悪感是有名である。）

ということ、逆効果を排除しながら良い教育をし続けたならばという期待感もあったことになるだろう。そこで、今回検討の対象にしたのが、「中学改良策」(明25・12 文科大学教育学論文)と「道楽と職業」(明44・8 明石に於て述)という一種の評論、そして芥川やその他の若者たちへの期待の仕方である。

## 二

夏目金之助として提出したと思われる、大学三年に在学中の論文「中学改良策」は、作家になる以前の、調査と考察によってまとめられた、一学生のレポートの域を越えた評論にもなっている。ここで夏目金之助が問題にした中学というのは当時の学校制度で、旧制中学(尋常小学校四年間、高等小学校二年間に続く五年間のこと)を指すのだが、その後、尋常中学校(各府県の管轄)と高等中学校(文部大臣の管轄)に分け、その高等中学校を全国の五区に設置することにした明治十九年から二十二年までのことに注目している。(四〇〇字詰め原稿用紙にして六十数枚におよぶこの力作のレポートは、文部省の政策への批判と提言になっており、奇しくもその後、松山中学と熊本五高へ赴任することになる漱石の書簡中で最も早く教師を辞めたいと述べたもの(明治30・4・23 正岡子規宛)の五年前のことであった。情熱と実際の落差あるいは希望と失望はそれほど離れてはいないというようなことは後に触れることにする。)

この論文は全三編からなる。「第一編 序論」は「望を将来に抱いて方今幾万の子弟を教育し之に日本人固有の資格を与ふる方手緩るき様にて實際は救済の最捷徑なるべし日本未来の運命は実に此の子弟の掌中にあり万代一系の美国を左右する人物を製造して之を後世に譲らん事之に過ぎたる偉功はあらじ況して目下の弊之を捨て、他に国運を挽回するの策なきに於てをや志あるものども宜しく国家の為に身を挺し全力を挙げて教育に従事すべき秋なり」と、教育の重要性を力説している。さらに漱石らしいのは、「固より国家の為に人間を教育するといふ事は理屈上感心すべき議論にあらず既に『国家の為に』といふ目的ある以上は金を得る為めにと云ふも名誉を買ふ為めにと云ふも或は欲を遂げ情を恣にする為に教育するといふも高下の差別こそあれ其の教育外に目的を有するに至つては毫も異なる所なし」とい、特別の目的のみを設定することを是としていない。どうするのが良いのかと言えば、「教育は只教育を受くる当人の

為めにするのみにて其の固有の才力を啓発し其天賦の徳性を涵養するに過ぎず」と言う。

けれども、「列国の中に立つて彼我对等の地位を保つ以上は国家は何処迄も万代不朽なるを冀はざるべからず之を冀ふと同時に其子弟を駆つて国の為になる様独立の維持のつく様にと鞭撻訓練せん事を当局者の責任にして而も子弟たるものゝ喜んで応ずべき義務なり」というふうには国家主義の教育を列強に伍して行くには仕方ないと認めている。

「第二編 維新以来中学の沿革」は、明治五年に全国を大学区中学区小学区に分ける学制（いわゆる旧制）を施行してからの制度の変遷（明治五年を基点として、一二年、一四年、一七年、一九年、二一年）を比較検討している。明治一七年に文部省が、全国を五区に分け、一区ごとに高等中学を一個置き、其の管区内の尋常中学卒業者を入学させる高等中学を置くこととした。大学予備門を改称した第一高等中学（東京）とし、仙台（第二）京都（第三）金沢（第四）熊本（第五）にそれぞれ高等中学を置き、鹿児島と山口に私立の高等中学を置くことを許可した。高等中学の目的の第一は大学に入る予備、第二は卒業後直ちに社会に出て仕事に就くためと説明している。そのような変革に対して、金之助は「愚見によれば五個の高等中学を一時に日本に設立せるは大に不得策なり」と言い、経済や他の条件がないから五個を起こす必要はない。高等中学に入る者は必ず大学来ると批判している。さらに、教師に適したる人物を一時に招聘することが甚だ困難であることも反対理由にしている。彼の意見によれば東京に一高等中学を置き、関西に一高等中学を設けるのがよい（京都は不可なり風俗地位共に国家の支柱たるべき人物を養成するに適さず）と述べている。さらに「文部大臣が尋常中学の程度を高むる方に尽力せずして徒に高等中学設置に配慮し東京地方にて落第したる余りの書生等を養成して得々たりしは余の解するに苦しむ所なり」とも言っていて、後の評論家漱石の面目を予期させるものになっている。

「第三編 中学改良策」は、「第一 大中小学校の連絡」「第二 教師の改良」「第三 生徒の改良」からなる。まず、「高等中学と尋常中学は甚だしき懸隔あり」「大中小学校の連絡を円滑にして一日も早く子弟の時間を徒費せしめざる事今日の急務なり」（二六歳か二八歳で大学を卒業させて「当今の如き粗末なる学士を製造する」に前後二十数年費やすのは浩嘆の至りだとも述べている）としている。

「教師の改良」についてはかなり激しい。まず「教員の資格」で、尋常中学校の教師は、僅かの学士と高等師範学校卒業生を除けば「学識浅薄なる流浪者多し是等の輩に托するに後來日本元氣の中心ともなるべき少年を以てするは害あつて益なし」とも言っている。学士でも「学あれど教授法に稽はず」、高等師範学校卒業生は「授業法には精しけれども学識に乏し」と批判している。

漱石の提案は、理科学科出身の学士を半年間教授及び訓練の方法を講究せしめ、さらに半年間地方の中学校に準教師として後に教員として採用するか、高等師範学校の程度を高めて充分学識ある卒業生を養成すべしと述べている。

また、「教員道德上の資格」は「自ら率ふるに高尚なる徳行を以てし以て衆生の模範たらざるべからず」と言い、大学の教授および高等師範学校の教授等は「深く此に鑑みて道德高き教員を製出する事に尽力すべし」と言っている。結論として「一方にては教員の資格を厳にして無頼の徒を退去せしめ一方にては之が俸給を増加して且つ終身官たらしめ安んじて力を教育に尽さしむべし」としている。

「生徒の改良」は、まず「生徒徳育の改良」として、「方今の少年子弟を見て驚くは其徳義心に乏しき事なり」と言い、「年輩徳識共に高き人を聘して毎週一回倫理上の講筵を開く事」、「漢文国語及び日本支那歴史は日本人の道德を堅固にするに必要なり」、教師授業の際は「我は学問の教師なり道德は我が関する所にあらずと澄して居るべからず」、「一級又は一年を通じて茶話会を組織し講学の余相会して互に所思を述べ以て名節を砥励するの具とすべし」、「教場は一級に一室を与ふべし」と金之助自身の経験も踏まえて提言している。(現代にも通じる点がある。)

「知育上の改良」として、「(一) 外国語及び数学」は重要だが、卒業して実業に就く者には時間を減らしてもよい、と言う。さらに「(二) 外国語の教授に最も配慮せよ」と言っている。そのためには前節の再論として、良い教師と教授法の改善を提言している。

教授法については、「可成卑近のものを撰んで高尚に失せざる様」に注意して教科書を選ぶこと。つぎに訳読法(直訳を避け意義をとる様にすべし)、読方(読方は訳読を付けたる場所に限るべしかくすれば「リーディング」と共に意義を解する習慣を生ず)、作文(作文に先つて文法と書き取りに熟練せしむべし)に言及している。

「(三) 他の諸科学の教授に就て」は、教科書を用いて暗誦させ、諸書を参考にして有益の「ヒント」を与えれば、生徒の記憶力を練習し試験前になって急に勉強する風を匡正できると言う。

最後に「体育上の改良」として、「体操は身体を練習するによきのみならず規律ある風習を養成するに必要なり且つ国家万一の時に当り平素の訓練を応用するを得るが故可成嚴重に之を行ふべし」と述べている。明治の人らしい発想である。

## 三

「道楽と職業」は、大阪朝日新聞社の依頼で、明治四四年八月一三日に明石で講演したもので、後に『朝日講演集』(明44・11 大阪朝日新聞社)と『社会と自分』(大2・2 実業之日本社)に採録されたものである。

「最高等の教育の府を出」た「天下の秀才」が汗を流して捜しても「自分の生命を託すべき職業」がないと嘆いている。職業は「開化」が進むにつれて非常に多くなっている。そのような現代では本当の「独立独行」はできない。「自分の力に余りある所、即ち人よりも自分が一段と抽んで、居る点に向つて人よりも仕事を一倍して、其の一倍の報酬に自分の不足した所を人から自分に仕向けて貰つて相互の平均を保ちつゝ生活する」と言う。それは「自分の為にする事は即ち人の為にすることだと云ふ哲理」であり、数学的に言えば「己の為にする仕事の分量は人の為にする仕事の分量と同じであるといふ方程式」が立つと説明する。「この関係を最も簡単に且明瞭に現はして居るのは金」(報酬)だと言う。だから、「成る可く人の為に働く分別をなさるが宜しからう」と言う。

漱石は、「人の為にする」という意味は手短かに述べれば「人の御機嫌を取る」(お世辞を使へばと云ひ変へても差支ない)という程度のことだと説明する。

漱石は「開化の潮流が進めば進む程、又職業の性質が分かれ、ば分かれる程、我々は片輪な人間になつて仕舞ふ」と言う。仕事が専門的になると(分業化が進むと)「隣のことを皆目分らなくなつて仕舞ふ」と言い、「大きく云へば現代の文明は完全な人間を日にく、片輪者に打崩しつゝ進む」と言う。だから、「自分一人では逆も生きて居られない人間」

になりつつあると言う。そのような「孤立支離の弊」をなんとかして矯めなければならぬし、「個々介立の弊が相互の知識の欠乏と同情の希薄から起つたとすれば、我々は自分の家業商売に逐はれて日も亦足らぬ時間しか有たない身分であるにも拘はらず、其乏しい余裕を割いて一般の人間を広く了解し又之に同情し得る程度に互の温味あたたかみを醸す法を講じなければならぬ」と言う。そのためには、(ここからが漱石の面目躍如たるところである)「文学書を御読みにならん事を希望する」と言う。その理由をつぎのように説明する。「元来文学上の書物は専門的の述作ではない、多く一般の人間に共通な点に就て批評なり叙述なり試みた者であるから、職業の如何に拘はらず、階級の如何に拘はらず赤裸々の人間を赤裸々に結び付けて、さうして凡ての他の墻壁を打破する者ママでありますから、吾人が人間として相互に結び付くためには最も立派で又最も弊の少ない機関だと思はれるのです」と結論づけている。この点に関して、小森陽一氏が言うように「漱石にとって小説とは、何をしているかまったくわからない『お隣り』の人について知る、隣人としての他者を認識する装置であり、場であり、方法にほかならない」(『世紀末の予言者・夏目漱石』平11・3 講談社)と云える。

そして小説家という職業について、「己の為にする結果即ち自然なる芸術的心術の発現の結果が偶然人の為になつて、人に氣に入つた丈の報酬が物質的に自分に反響して来たのだと見るのが本当だらうと思ひます」と付け加える。偶然の結果(僥倖とも言う)だから、それは「道楽的職業といふやうな一種の変体」であると結んでいる。

先に触れた正岡子規宛(明30・4・23)書簡の中で、「教師は近頃厭になり」と言い、子規が何をしたいのかという問いに答えて、「教師をやめて単に文学的生活を送りたきなり換言すれば文学三昧にて消光したきなり」と言っていた頃から十四年後の心境として、また道楽(自己本位)と職業(他人本位)の努力の結果としての「偶然」に安心をえたことを語っている。しかし、依然として教育者のな人情を失っていないことは次節で述べたい。

漱石が友人や教え子の就職の世話や日常生活の心配をしたり、情に厚い人だったことはよく知られている。

作家になった弟子の筆頭である芥川龍之介が夏目漱石邸の木曜会（面会日）を久米正雄といっしょに初めて訪問したのは、大正四年一月一八日だったことが関口安義氏の研究によって明らかになったのだが、それまでの第四次『新思潮』の久米正雄、松岡譲、芥川龍之介、菊地寛らが直接に漱石に習っていないくとも、師と仰いでいたことが彼らの手紙などから推察できる。

その漱石が晩年に「鼻」を読んで、大正五年二月一九日に芥川龍之介宛書簡で次のように褒めた。——「拝啓新思潮のあなたのもと久米君のものと成瀬君のものを読んで見ましたあなたは大変面白いと思ひます落着があつて巫山戯てゐなくて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります夫から材料が非常に新らしいのが眼につきます文章が要領を得て能く整つてゐます敬服しました。あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます然し『鼻』丈では恐らく多数の人の眼に触れないでせう触れてもみんなが黙過するでせうそんな事に頓着しないでずん／＼御進みなさい群衆は眼中に置かない方が身体の薬です」と。卒業間近かの芥川が文壇へ登場する大きな励みになっている。

さらに、鎌倉ではなく千葉県の一の宮に久米正雄といっしょに滞在中の芥川たちは漱石に手紙を出した。その返事（大5・8・21）に漱石は次のように書いた。——「あなたがたから端書がきたから奮発して此手紙を上げます。僕は不相変『明暗』を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。（略）あなたの方の手紙を見たら石印云々とあつたので一つ作りたくなつてそれを七言絶句に纏めましたから夫を披露します。久米君は丸で興味がないかもしれませんが芥川君は詩を作るといふ話だからこゝへ書きます。

尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗双双三万字。撫摩石印自由成。

(句読をつけたのは字くぼりが不味かつたからです。明暗双双といふのは禪家で用ひる熟字であります。三万字は好加減です。原稿紙で勘定すると新聞一回分が一千八百字位あります。だから百回に見積もると十八万字になります。然し明暗双双十八万字では字が多くなって平仄が差支へるので致し方ありません故三万字で御免を蒙りました。結句に自由成とあるは少々手前味噌めきますが、是も自然の成行上已むを得ないと思つて下さい)

一の宮といふ所に志田といふ博士がゐます。山を安く買つてそこに住んでゐます。景色の好い所ですが、どうせ隠遁するならあおの位ぢや不充分です。もつと景色がよくなけりや田舎へ引込む甲斐はありません。

勉強をしますか。何か書きますか。君方は新時代の作家になる積でせう。僕も其積であなた方の将来を見てゐます。どうぞ偉くなつて下さい。然し無暗にあせつては不可ません。たゞ牛のやうに凶々しく進んで行くのが大事です。文壇にもつと心持の好い愉快な空気を輸入したいと思ひます。それから無暗にカタカナに平伏する癖をやめさせてやりたいと思ひます。是は両君とも御同感だらうと思ひます」と。

新時代への期待を込めたものでもあり、先輩としての愛情にも満ちた教育的側面を示す文面であつた。牛のやうにへうんうん死ぬ迄押すのです(大5・8・24 芥川・久米宛)という漱石の激励とはいささか違ふ形で芥川は大正時代と昭和時代の初頭の世界大恐慌突入直前の世相を走り抜けた(昭和二年七月二四日没)。作家として名をなした芥川の生き方が漱石の意に沿うものであつたかどうかは聞く由もないが、偶然にもその作家生活の時間は漱石に似てほぼ十年前後と短かつた。短かいということは必ずしも薄幸を意味しない。

その手紙に対して芥川は、八月二八日付書簡で「先生 また、手紙を書きます。嘸、この頃の暑さに、我々の長い手紙をお読になるのは、御迷惑だらうと思ひますが、これも我々のやうな門下生を持った因果と御あきらめ下さい、その代り、御返事の御心配には及びません。先生へ手紙を書くこと云ふ事がそれ自身、我々の満足なのですから」という前書きで始まり、「いよいよ九月一日が近づくので、あんまりいゝ気はしません。先生にあやまつて頂くよりは、御礼を云ふやうになる事を祈つてゐます。／今日、チェホフの新しく英訳された短篇をよんだのですが、あれは容易に軽蔑出来

ません。あの位になるのも、一生の仕事なんでせう。ソログウブを私が大に軽蔑したやうに、久米は書きましたが、そんなに軽蔑はしてゐません。ずるぶん頭の下るやうなパッセエヂも、たくさんあります、唯、ウエルスの短篇だけは、軽蔑しました。あんな俗小説家が声名があるのなら、英国の文壇よりも、日本の文壇の方が進歩してゐるさうな気がします。／＼我々は海岸で、運動をして、盛に飯を食つてゐるんですから、健康の心配は入りませんが、先生は、東京で暑いのに、小説をかいてお出でになるんですから、さうはゆきません、どうかお体を御大事になすつて下さい。修善寺の御病氣以来、實際、我々は、先生がねてお出でになると云ふと、ひやひやします。先生は少なくとも我々ライズイングジュネレイションの為に、何時も御丈夫でなければいけません、これでやめます」と書いています。

漱石の期待に応えたいと新しい世代が思っている様子が見える。明治時代という産業資本主義社会の進行の中で新しい生き方を模索する若者への激励は芥川に対して以外にも続けられることは次節で述べたい。